

福祉国家のワークライフバランス効果 (2)

働く母親の経験をめぐる日台比較



2017 年度調査実習報告書

名古屋大学文学部社会学研究室

目次

はしがき	iii
第Ⅰ部 日本と台湾の統計データ比較	1
1章 日台の働く母親をとりまく状況（劉叡）	3
2章 雇用システムと女性の労働時間（隅田龍之介）	13
3章 母親の働き方に関する理想と現実のギャップ（角優月）	21
4章 共働き世帯における家事分担は進んでいるか（笹田めぐみ）	33
5章 日台で異なる男性の家事・育児参加（森優帆）	45
6章 三世代同居促進政策の限界（翟方舟）	57
第Ⅱ部 働く母親へのインタビュー調査	65
7章 子育て支援制度の現状——概要と都市間比較（松田翔平）	67
8章 キャリア志向が女性のワークライフバランスに及ぼす影響（坂尾真実）	81
9章 生活時間におけるワークライフコンフリクト（水野志歩）	93
10章 夫が家事参加するはどのような場合か（大滝裕也）	107
11章 器用型ワークライフのすすめ——両立のくふうの語り分析（前田佳穂）	117
12章 育休取得をめぐる台湾の母親たちの戦略（橋本洋治）	129
第Ⅲ部 インタビュー調査の記録	139
日本編（Aさん～Tさん）	141
台湾編（aさん～hさん）	183
あとがき	207

はしがき

この3月で名古屋大学を定年退職される楠美智子先生は、ナノカーボン研究の世界的権威である。楠先生の研究のすごさは素人にはとても解説できないが、米国で編集された『世界100人の女性セラミック研究者』(Madsen ed. 2016) という本に紹介された2人の日本人のうちの一人であることからも想像できるだろう。

楠先生は1980年に東京工業大学の博士課程修了と同時に結婚し、御主人の転勤で名古屋に移り住んだが、東工大の助手になったのでしばらくは新幹線で通勤していた。ところが、お子さんが生まれたのを機に助手を辞め、いったんは研究キャリアをすっぱりと諦めてしまったそうだ。『子供があまりにも可愛く、人に預けるのがもったいない』(楠 2011: 734) と考えたのだそうである。当時は育児休業制度もなく、仕事を続けるには産休だけで職場復帰する必要があったことも大きいだろう。

その後、楠先生は名古屋でパートタイム研究員の職を得て、2人のお子さんを育てながら研究を続ける。「毎朝、通勤中の車の中で、今日やろうとしている実験のアイデアを練っている時間は、至福の時であり、ルンルン気分で運転していた」(同: 735) という。やがてお子さんの成長とともにフルタイムに復帰し、2007年からの10年間は名古屋大学教授として研究室を主宰し学生たちとの研究生活を楽しむことができた。

楠先生のキャリアコースは、私たちの社会学的想像力を刺激するものだ。育児休業制度がなかった時代には、多くの女性がキャリアを諦めたに違いない。楠先生の才能も、埋もれてしまう可能性が十分にあった。しかし、パートタイムでキャリアをつなぐうちに研究上のきっかけをつかんだことで、のちに大輪の花を咲かせることができたのである。

楠先生にワークライフバランス調査の話をしたところ、意外な感想が返ってきた。「最近の育休制度はキャリアがつながって良い反面、仕事が気になって落ち着いて子育てできないんじゃないかな」と。うーむ。これをそのまま本報告書の結論とするわけにはいかないが、最近の常識だけに囚われていては人類の未来は展望できない。仕事と子育ての両立に関して、現在の日本における解が最適解であるとは限らない。

ところで、社会学的想像力とは、「いま・ここ」の常識に囚われない洞察力のことだ。いま・ここに囚われない洞察を得るには、時間的(歴史)ないし空間的(国際比較)に、いま・ここをいったん離れてみることが有効である。楠先生のケースは、いま・こここの常識を時間的に相対化するものだ。一方、日本の現状を諸外国と比較すれば、いま・こここの常識を空間的に相対化することができる。例えば、お隣の台湾と比べたらどうなるか。

台湾の働く母親たちはエネルギーだ。子どもの世話は自分や夫の母親に任せて、長時間勤務もいとわずに働く人が多い。だが待てよ。調査で大事なのは、会えなかった人の人生を想像することである。インタビューに応じてくれた人は幸せそうだったが、日本以上に保育サービスが整っていない台湾では出産を諦める人も多いのではないか(楠先生世代のリケジョたちもそうだったかもしれない)。そうしたことは、統計データと照らし合わせて考える必要がある。ミクロとマクロのつながりを洞察するのも社会学的想像力である。

さて、名古屋大学文学部社会学研究室の2017年度の社会調査実習は、昨年度に引き続き「福祉国家のワークライフバランス効果」をテーマに掲げた。上記のような意図で、本年度は統計分

析（本報告書の第Ⅰ部）とインタビュー調査（本報告書の第Ⅱ部に分析、第Ⅲ部に調査記録）による日台比較を試みた。統計分析については、日本と台湾の官庁統計のほか、ISSP（国際社会調査プログラム）の2012年データを分析した（詳しくは1章の末尾を参照）。インタビュー調査については、日台で調査の性格が異なることに御注意いただきたい。日本では、昨年度の企業調査に応じて下さった名古屋市内の企業の人事部から、就学前もしくは小学校低学年のお子さんを持つ女性正社員の紹介を受けた。製造業2社（5名）と卸小売業4社（15名）の計20名に対して、2017年8月に各1時間程度の聞き取りを行なった（参加者全員で分担した）。調査対象者は、もちろん優良企業の正社員に偏っている。一方、台湾では、蔡培元・国立政治大学助理教授および戴伯芬・輔仁大学教授から、就学前もしくは小学校低学年のお子さんを持つ女性正社員の紹介を受けた。台北（4名）と台中（4名）の計8名に対して、2017年9月に各1時間程度の聞き取りを行なった（中国語ができる院生と教員・TAで担当した）。研究者に紹介を依頼した結果として、調査対象者は高学歴の管理職に偏ってしまった。とはいえ、偏りをふまえてもなお、日本と台湾の対照は鮮明である。

何よりも、インタビューに快く応じて下さった働くお母さんたちに感謝の言葉を伝えたい。調査記録はいずれ、時代と人生の証言になるだろう。働くお母さんたちを紹介して下さった企業の人事部の方々には、昨年度に引き続き大変お世話になった。本報告書を何かのヒントにしていただけるなら望外の幸いである。台湾調査は、名古屋大学環境学研究科の研究科長裁量経費によって可能となった。台湾では、上記の蔡培元さんと戴伯芬先生のほか、国立台湾大学の孫中興先生と施世駿先生にもお世話になった。皆様ありがとうございました。

本年度の社会調査実習は、同僚の福井康貴准教授とTAの吉村真衣さんに御協力いただいたことで昨年度より一層充実したものになった。福井先生には主に統計分析班の指導をお願いした。吉村さんは、主に日本のインタビュー調査のマネジメントと、原稿添削および編集作業を担当してくれた。お二人には台湾調査にも参加していただいた。

本報告書の各章には推論の誤りや展開不足の箇所もなお残されているが、ここまでやり遂げた12名の実習参加者に拍手を送りたい。

2018年3月22日 上村 泰裕

参考文献

- 楠美智子, 2011, 「女性科学者よ、幸せであれ。」『表面科学』Vol.32, No.11.
Madsen, Lynnette (ed.), *Successful Women Ceramic and Glass Scientists and Engineers: 100 Inspirational Profiles*, John Wiley & Sons, 2016.

福祉国家のワークライフバランス効果（2）

——働く母親の経験をめぐる日台比較

2017年度調査実習報告書

2018年3月31日 印刷・発行

名古屋大学文学部社会学研究室

464-8601 名古屋市千種区不老町 780

e-mail kamimura@nagoya-u.jp